

# 北海道とハッカ(薄荷)

北見ハッカ記念館・薄荷蒸留館 館長

**山口 淳一** (やまくち じゅんいち)

1952年北見市生まれ。2018年4月より現職。北見東ロータリークラブ会員。  
趣味はテレビでスポーツ観戦。



## ハッカ(薄荷)の歴史

ハッカの歴史は人類とともに古く、3,500年前頃にはギリシャで生薬として利用され、3,000年前頃にはエジプトで栽培されていました。その油は富豪の香水風呂に用いられ、貧しい人々は傷口を癒すのに使っていました。また、エジプト人のミイラの頭の下に、乾いたハッカの葉が敷かれていたことも発見されています。ペルシャやギリシャ、インドの古代文献にも薬用としてハッカが使われていたことが、記されています。新約聖書の中にもタミン・イノンド等の香草の名とともにミントがでてきます。その他、中国の古くからの書籍の中にも薬用として見受けられ、人の手によって栽培された歴史上最も古い栽培植物の一つにも数えられています。

ハッカの種類は多岐にわたりますが、その代表的なものは、古くから日本で栽培されてきた和種ハッカ(学名・メンタカンデンシス)と米国、欧州を主産地とする洋種ハッカ(学名・メンタペリタ)に大別されます。その品質上の違いは、和種ハッカがハッカ独特の芳香と涼味をもつメントール(ハッカ脳といい、針状六方結晶体)を多量に含み、この抽出を主目的に栽培されるのに対し、洋種ハッカは、ほとんどメントールを含まないことであります。従って、和種ハッカは昔から、ハッカ脳とハッカ油に分けて、それぞれの用途に使用されてきました。メントールには、抗炎症作用、局所麻酔作用、防虫作用、抗菌作用、消臭作用、

芳香作用、鎮静作用、保湿作用、その八つの効能により、胃薬、目薬、湿布薬、石鹸、シャンプー、練り歯磨き等々に利用されています。

一方、洋種ハッカはほとんどメントールを含まないため液体のまま使用されますが、これも独特の芳香と涼味をもち、その代表的な種類はスペアミント(緑ハッカ)油とミッチャム(ペパーミント)油です。料理でミントといえばスペアミントのことといわれるくらい、スペアミントは人間の生活と深いかかわりをもってきました。

ハッカの原産地は明らかではありませんが、野生種の分布状態や現在の栽培種などから和種ハッカは、中国が原産地ではないかといわれています。一方、ハーブの世界で栽培されている各種のハッカは、洋種ハッカが多く地中海沿岸が原産地ともいわれています。また、一説によれば、中国からインド、エジプト、ヨーロッパ、アメリカへと伝播し日本へも中国から伝来したといわれています。中国から西へ移されて香りのハッカとなり、東に移し植えられて薬のハッカになったともいわれています。

和種ハッカは中国から日本、朝鮮、シベリアの湿地に生えるシソ科の多年草です。茎は四稜をもち高さは60cmくらいです。葉は対生し長楕円形で長さ2~5cmで、葉の縁に鋸歯があります。花は茎の上部の葉腋に輪状に小群ずつ咲き淡紫色で小さく地下茎で繁殖します。茎葉に強いハッカ香があり、ハッカをとるために

昔から日本で栽培されてきました。茎葉をとって水蒸気蒸留すると黄緑色の液（取卸油）がとれ、これを冷却精製すると無色針状結晶のハッカ脳とハッカ油に分かれます。ともに主成分はメントールであり、菓子、飲み物、薬などに清涼感を与えるための香料として用いられます。

### 日本への伝来

「皇紀六百年（紀元前六十年）既にハッカを栽培していた」という説があります。長崎に出入りしていた支那人によって伝えられた種が、最初は肥前諫早で栽培され、それが山城・富野に伝わりさらに各地に広まったのではないかとされています。また、別の説では僧、栄西が1191年修業のため訪れた中国の帰国時に、ハッカとお茶を持ち帰り、ハッカは山城の長池で、同時に持ち帰った茶は宇治で栽培したのがはじめとされています。

### 北海道への伝来

岡山県でハッカの栽培がはじまり広島県、山形県等に広がり、北海道では明治17年に日高門別で、明治18年には八雲の徳川農場で栽培を試みますが、条件が合わず失敗します。明治24年旭川永山村の屯田兵石山伝右衛門が、郷里の山形県東村山から種根を移入しハッカ草の栽培をはじめました。永山が北海道ハッカ栽培のはじまりとされています。昭和29年湧別の渡部精司が永山から種根を取り寄せ栽培を行います。翌30年には、遠軽の小山田利七が郷里の山形県からハッカを取り寄せ栽培、最初の年は成績がよかったのですが、蒸溜道具がなかったため乾燥して保管しました。2年後には、郷里の山形より天水桶を持ち帰り最初の蒸溜を行い取卸油を得たが、買人がいないため山形に持参したところかなりの価格で販売することができたのです。以後、小山田はハッカを農家の副業として奨励しました。

北見地方においては、明治30年頃から屯田兵や開拓団の入植がはじまり、開拓が進むとともにハッカの栽培が北光社移民団や屯田兵の間でも栽培の気運が生まれました。

明治34年頃から北見地方のハッカ栽培が急速に普及

し、湧別、斜里、野付牛（北見）とハッカ草は療原の野火のごとく管内に広まっていきました。

明治37～45年頃には、作付面積も1,200haから5,000haと著しい増加を示し、さらに大正3～5年には10,000haに達しましたが、第1次世界大戦の影響をうけ8年には1,500haに激減し、その後再び増加の一途を辿り昭和13～14年頃には20,000haを超えるまでになりました。

ハッカが開拓期に急激に広まった理由は、「他作物と比較して価格が高かった」「荷が軽く道路が未発達な開拓時代には搬出が容易で輸送費の軽減につながった」「北見地方の気候や土壌条件が栽培に適していた」「ハッカ稈が、開拓に必要な馬の飼料として適していた」からといわれています。

### 栽培から製品まで

ハッカは、種根と呼ばれる草の根を約5cmに切り、秋に畑に植え付けをします。雪の下で冬を過ごした根は春には芽を出し夏に成長、8～9月に刈り取られ、ハサかけによる乾燥の後、蒸溜され取卸油が取れます。蒸溜釜の構造は、釜の下から鍋で沸かした水蒸気を送り込むと、茎葉に含まれるメントールが熱い水蒸気に溶け、水蒸気と一緒に蓋の中心に取り付けられた管を通して釜の外に出て冷やされて液体となります。比重の違いにより水と油が分離するので容易に取り出すことができます。

ハッカは、地下茎で増殖します。この地下茎を「種根」と読んでいます。一度、種根を植え付けると、毎年春には芽を出し、秋には収穫できる種根作物です。しかし、肥沃な土地でも連作を続けると地力が衰え病菌や雑草の発生の原因となり、収量も減少してきます。

種根は、低温には比較的強いが乾燥には弱く、土中水分が20%以下になると発芽不良になります。植え付



けの時期は晩秋と早春のどちらかで行われるが、秋植えの方が望ましいです。11月頃になると地温も下がり、病菌による種根の腐敗を防ぎ収量も増すからです。

### ハッカの栽培

①種根を掘り取る。②土を耕し整地する。③畦幅<sup>あぜ</sup>50～60cmの浅い溝を掘る（作条）。④肥料を加え土とよく混ぜる。⑤作条に種根を並べる（畦長30cm間に3～5本）。⑥上に2～3cmの土を被せる。

除草作業は、最も労力を要した作業で年3～4回行います。また、8月上旬～9月中旬には病害虫駆除の作業も行われます。ハッカの刈取りは、花の蕾<sup>つぼみ</sup>ができてから開花期までが適期（9月上旬～中旬）とされています。乾燥は、1～2週間が標準で不十分だと蒸溜のとき、蒸気の通りが悪くなり取卸油の収量が少なくなります。また、乾燥しすぎると葉が落ちたり精油が樹脂化して油糧も減少し、色沢や香味も不良となります。乾燥の仕方は、吹き抜け小屋での連乾燥、屋外ではハサ乾燥、しま乾燥、地乾燥があり、手軽なハサ乾燥が多かったようです。

### ハッカの取引

明治後期、神戸、横浜の大手商人が生産地の北見地方へハッカ取卸油の買い付けに入り込んでいました。商人たちは、生産者農民の販売に対する知識不足に付け込んで、本州の岡山産よりはるかに安値で買い付けていました。価格は、大手商人たちの協定により意のままに決められていたのです。ビール瓶2本で1組（1.2kg）として、代金の清算は、品物と引替えに1組

3～4円の前渡金が支払われ、残金を積出港（下湧別・網走）から横浜に着いた時点で、「上がり相場」と称し1組当たり50銭～1円の追加払いが行われました。

### サミュエル事件

大手商人たちに価格を意のままにされるハッカ生産者を見かねた当時の上湧別村長は、道庁を通じて神奈川県知事に価格協定に参加しない商人の紹介を依頼しました。そこでロンドンに本社をもつサミュエル商会の横浜支店が紹介されました。野付牛（北見）では同志会が組織され秘密裏に交渉が進められました。大正元年11月30日、道農会が中心となりサミュエル商会と生産者との間に一手委託販売契約が締結されました。10万5千斤を集荷し前渡金は、1組9円とするものでした。この共販には、野付牛をはじめ上湧別、美幌、永山、士別などから1,300余名が参加しました。しかし、この締結は、翌日、大手商人に知れ渡ることになり、大手商人たちは、自らの価格協定を破り高値買い付けに乗り出しました。生産者側は、サミュエル商会との契約にもかかわらず、突然の高値に浮かれて入札や随意契約など大手商人に1組15円以上で売る者もいて、大騒ぎとなりました。これに対し道庁、道農会、村役場などは、契約厳守を説いて地域を回ったが、全量の委託はできずかなりの量が大手商人に流れてしまったのです。この年は、豊作でもあったのでサミュエル商会への委託は、10万4千3百斤をどうにか集荷できました。商会は、これを横浜で精製し「三味線」ブランドとしてロンドン市場に売り出しました。しかし、市場の反応は冷たく在庫を抱えて売り悩み、1年半後にやっと安値で販売を終える状態でした。農民に支払った前渡金と販売した収支不足額など赤字を生ずる結果となったのです。

翌年の大正2年サミュエル商会は、1組7円の前貸金を渡し10万斤の受託契約を結びました。一方、協定商人たちは6円40銭を発表しましたが、生産者は前年に続き高値を期待してこれを無視、しかし、協定商人たちは前年の損害を取り戻そうと策略をねって、年の暮れになりさらに安く5円40銭と発表したのです。大凶作の年で高値を期待していた農民は、怒りが

大正年間のハッカ取卸油相場の推移

大正 (年)	野付牛(北見)		岡山県	
	高値(円)	安値(円)	高値(円)	安値(円)
1	7,650	3,900		
2	3,200	2,700		
3	1,850	1,650		
4	2,200	2,075		
5	3,750	2,500		
6	3,120	2,000	4,200	3,200
7	6,600	2,000		
8	17,500	4,750	23,000	6,500
9	16,000	3,300		
10	5,750	3,000	6,200	4,500
11	10,750	5,000		
12	11,259	6,750	15,000	8,800
13	18,750	10,000		
14	17,000	7,500	19,000	9,000
平均	8,883	4,009		

爆発し百姓一揆のような騒動になり、殺されかけ警察に保護を願い出た商人も続出しました。そこで、商人たちは金一封を包むから勘弁してほしいと、「包金」を翌年の大正3年1月2日に開けることを約束して取捨を図りました。正月になって開けてみたところなんとわずか20銭で、農民の開いた口は塞がらなかったのです。この年サミュエル商会が集荷した取卸油は、契約の半分強の5万7千斤にとどまりました。苦悩したサミュエルは、生産者に対し契約不履行の責を迫るとともに、未出荷分の前貸金の返済を強く求めました。一方、生産者たちは、サミュエルに対し初年度以来出荷した取卸油の清算を強く求め、経営の不振を責め激しい紛争となったのです。官民関係者が中に入って、事態の收拾を図ろうと努力したが解決を見ることはありませんでした。

大正3年、第一次世界大戦が起こりサミュエルはハッカの受託を停止、農民の共販組織も崩れてしまいます。もはや競争相手のなくなった協定商人たちは、3組で10円（1組3円30銭）という最低の価格で買い取りました。これが大正3年の史上最低価格（記録的安値）です。生産者は過酷な仕打ちを受けたのです。

大正4年、サミュエル商会側と生産者側の双方から4件の訴えが横浜地方裁判所に提起されました。大正8年第1審が行われ、大正元年にかかわる争いでは、農民側が勝訴、大正2年にかかわる争いでは、サミュエル商会が勝訴し一勝一敗の結果となったのです。この争いは、さらに控訴され大正12年春に第2審があり農民側が勝訴したといわれています。しかし、9月の関東大震災により横浜裁判所が被災し、関係書類が消失したため裁判は立ち消えになったともいわれています。また、長期にわたる裁判費用の捻出に苦しむ生産

者の惨状を見た仲介者により妥協和解したとも伝えられ、真相は定かではありません。この起訴でサミュエル商会の事業は完全な失敗に終わりました。一方、生産者農民の負った犠牲も大きかったのです。サミュエル事件・裁判を通じて、農民自らの力で農業を守るためお互いに協同することの大切さを身を持って体験しました。これを契機に各地に産業組合運動が急速に広まりました。

大正3年の史上最低価格以来、ハッカの作付面積は、明治末期から大正4年まで首位を保ってきたが、大正6年以降はえん豆、菜豆などに上位を譲り、同8年には一時的にせよ10位以下に転落するほどでした。大正8年には1,500haにまで減少した本道のハッカ作付けも、その後の国際相場の上昇により徐々に回復、同15年には13,000haとなり、昭和14年にはハッカの世界生産高の約7割を北見地方で生産するまでになったのです。しかし、ハッカの取引には依然大手商人による価格操作が行われ、第一次世界大戦による価格変動を経て、ハッカは投機農産物の花形になったのですが、そのしわ寄せを受けたのは結局、生産農家でした。輸出市場で先物取引が盛んになり、勢い産地でもその現物手当てをめぐって先物売買、思惑取引が横行するようになって、生産者はサミュエル事件後、約20年間大手商人や産地仲介人による不当な取引により痛めつけられたのです。このような取卸油取引の不明朗さを助長したものの一つは脳分検査でした。取卸油は脳分が高いほど良品とされますが、当時は品質面の基準が設定されておらず、脳分は商人の意のままに決められていました。そこで北見四群農会は、こうした弊害を一掃するとともに生産の改善を促進するため、大正15年1月の協議会で道営検査の実施を決議し、道庁長官に

北海道各地・全国 年度別ハッカ作付面積

(単位：ha)

明治 (年)	札幌	空知	上川	浦河	河西	釧路	網走	増毛	全国
30			0.6						
31			2.2						
32			2.4						
33			0.5						
34							10.0		
35			35.1				42.1		
36			57.6				83.6		
37			223.5		2.0		991.8		
38		18.9	223.5	0.3	1.8	0.9	752.3	0.5	3,865.0
39	10.0	25.0	143.5	0.6	7.5	1.1	905.8	2.3	2,276.0
40	10.0	17.8	223.8	1.1	131.8	1.0	1,691.9	2.0	3,781.0
41	10.0	12.1	227.4	1.9	99.7	0.7	1,554.5		2,307.0
42	10.0		307.1	0.9	43.5	1.0	1,863.5		

請願しました。その結果、昭和2年から除虫菊、亜麻と同様、ハッカも道営検査品目に追加され、同年10月1日から網走支庁管内で実施されたところ、成績が良かったので昭和2年から北海道農産物検査所が道営検査を実施するようになりました。ただ、実施当初は商人の反対が強く軌道に乗り出したのは昭和4年からです。昭和6年北聯<sup>ほくれん</sup>は野付牛に支所を設け、ハッカの販売事業に着手します。しかし、本州商人たちの不買運動に合い危機に陥ってしまいます。それは、集めたハッカを加工する方法がなかったからです。加工施設・輸出能力を持たないことが、いかに弱いものかを思い知らされ、これを機にハッカ工場建設への動きが急に高まったのです。

昭和7年、北聯総会でハッカ工場の設置が満場一致で決議されました。昭和8年の9月には建設に着工し、11月には完成というスピードでできあがりしました。総工費11万4,000円（うち道助成金4万2,000円）を要し、北見では初めての鉄筋コンクリート2階建てでした。昭和9年、ハッカ農民の直営工場がついに操業を開始しました。商人のなすがままだった北見のハッカを農民自らの手に取り戻したことの意義は大きかったです。新ハッカ工場は、何よりも海外市場の開拓が急務でした。昭和9年9月「HOKUREN」ブランドのハッカ脳10ケースが、小樽港からアメリカへ初輸出されました。品質の良さが高く評価され、その後、続々と注文が殺到し3年目には他のものより高く取引されました。そうしてロンドンをはじめ、ヨーロッパや東南アジアへと販路を広げていきました。昭和14年頃には、作付面積約20,000ha、取卸油700t以上の生産高を上げ、ハッカ工場からは、ハッカ脳、ハッカ油を合わせて336tの製品が輸出されました。世界市場の7割を制し世界一のハッカ王国にのし上がりました。

しかし、その後、第2次世界大戦がはじまると輸出は止まり、ハッカは不急不要の作物として減反を強いられます。このため昭和18年には、昭和15年の3分の1の作付け面積3,800haに激減しました。しかし、生産者農民のハッカへの情熱は根強く、昭和21年には産地北見を中心に23市町村薄荷耕作組合が設立され、翌

年には、ハッカ134ケースがアメリカへ輸出されました。北海道農業試験場では、ハッカの反収増や耐病性の高い品種の改良に努め「すずかぜ」「まんよう」の新品種を誕生させ、取卸油の平均反収5kgと極めて優れていました。昭和24年750ha、取卸油15tにまで減収しますが、昭和32年には作付面積が10,000haに達し、戦後のピークとなりました。しかし、ブラジル産ハッカの進出、貿易の自由化に対処するために昭和35年頃から増産対策が必要となりました。新品種「おおば」の早期普及栽培、省力機械化栽培の導入、蒸溜作業の改善と共同化、優良時期品種の研究、価格の安定と輸出体制などが対策として打ち出されました。ハッカの復興対策によって、一時、増産傾向を示しましたが大きな流れの中で、ハッカは衰退の一途をたどっていき

### ハッカの衰退

昭和初期の日本からの移民団がブラジルへ持ち込んだ道産の「あかまる」がブラジルの気候にあい広まったのです。中国や台湾のハッカも世界市場に進出してきました。また、合成ハッカの技術が進み品質向上、安価により昭和41年には、合成ハッカ脳が50%近いシェアを占めるようになったのです。その後、80%のシェアまで拡大、貿易の自由化の圧力が強まり、ハッカの自由化が決定、暫定関税処置を実施するが昭和58年関税引き下げが行われ、北見薄荷工場の幕が降ろされました。

国内では、最後に残った北海道農業協同組合連合会北見薄荷工場が閉鎖されたことで、道内ハッカ産業の歴史の区切りとなりました。現在では、北見ハッカ記念館・薄荷蒸留館では、北見ハッカにまつわる歴史的遺産が展示されております。



北見ハッカ記念館

HP: <http://www.kitamihakka.jp/>

\*参考とした文献は北見ハッカ記念館所蔵。